

副島隆彦、武田邦彦著「原発事故、放射能、ケンカ対談」幻冬舎 2011年6月30日刊を読む

## 原発事故、放射能、ケンカ対談

1. 福島第一原発事故は、これまでの日本の多くの「常識」を覆した。それは、「国民を守るために正しい情報を提供し、行動を促す“政府”というものが日本にはなかった」という現実が始まる。今は食品の安全性に関することまでに及んでいると思われる。
2. かつて、水俣病、四日市ぜんそく、そしてカネミ油症事件など、数々の公害を経験した日本は、公害を起こした企業の責任を徹底的に糾弾した。そうした経験を経て、企業は、保有する工場が爆発して付近住民に膨大な被害を与えたら、存続できないほどになっている。それを主導したのは新聞だった。
3. かつて、キャラメルにわずかのホルムアルデヒドが混入したことがあった。食品安全の法律に抵触するわけでもなく、もちろん子どもの健康に影響を及ぼすものでもなかったが、「本来、食品に入るべきではないものが入った」ということで、600万個のキャラメルを廃棄処分にして、社会もそれを受け入れた。それを主導したのも新聞とテレビだった。
4. 今、数十万人の福島の人が、空から降ってきた放射性チリからの被ばくに苦しみ、宮城県から静岡県までが土壌や野菜の汚染に苦しんでいる。それなのに、政府は何もせず、東電は自分の工場(福島原発)に閉じこもって社員は片付けにも来ない。
5. かつてあれほど、企業の不始末を糾弾した新聞やテレビは、事故当初からこぞって「健康に影響はない」「騒ぐほうがおかしい」と言い、こともあろうに、「応援するために、放射性チリで汚染された野菜を子どもに食べさせよう」といったようなキャンペーンまで打っている。一体、どうなっているのだろうか。
6. 私の解釈は、「人間は自分の能力で処理できないものについては、思考が停止する」という原理が働いているからと考える。
7. すでに、震度6以下の地震で、新潟・柏崎原発、福島・福島原発、宮城・女川<sup>おながわ</sup>原発、そして青森・東<sup>ひがしどおり</sup>通原発の4基が100パーセントの確率で破損されている。それにもかかわらず日本の原発が運転されているのは、技術的にはまったく考えられないことである。

8 . 医学の分野では、今まで「1年1ミリシーベルト以上はきわめて危険だ」という厳しい法制度があったのに、事故直後から「1ミリなど何の意味もない」ということが言われるようになった。1ミリ<sup>うんぬん</sup>云々という話より、そのようなことが口にされること自体が私には信じられない。

9 . 半減期 30 年の放射性チリのために、福島の大気は、100 年は快適に住むことができなくなった。本来は、今、直ちに徹底的な除染をしなければならないのに、「大丈夫だ」という話があるために、それも始まっていない。

10 . しかしここで私たちは、もう一度、立ち止まって考える必要がある。この原発事故が私たちの理解を超える問題であること、それに対してまったく準備をしていなかったこと、情報が混乱していることが今ハッキリした。

11 . このようなとき、私たちはどうすべきだろうか？

12 . 直ちに行動しなければならないことは行動するとして、同時並行的に、「異なる考え」を持っている人たちが、自分の意見にこだわらず、公然と、真正面から対決し、ケンカし、その中から一刻も早く、「秩序立った考え方」を生み出して行かなければならない。対決は、冷静であっても、紳士的であっても、また激しい言い争いでも、時に感情的な対立であっても良い。そのぐらいいないと、この難問は解決しないだろう。

武田邦彦

P4 ~ 6

#### [コメント]

福島県の運命を変えるような放射能汚染に関する本質的な討論。なぜこのような議論が国会や地方議会で行われぬのが不思議でならない。それにしても大変な事態だ。

- 2011年7月10日 林 明夫記 -